

○K君 平成6年7月生 自閉症 現在25歳

平成25年4月 18歳でアンサンブル利用開始

GH（共同生活援助）と日中は行動援護利用

平成29年7月より日中は行動援護（3時間）と生活介護を組み合わせ利用

最初は個別対応を行い、K君の行動や様子を細かく観察した。自室の物をほとんどすべて破壊、飛び出しと職員に対する他害行為が頻発。常に一对一の支援を求めてきた。

○K君の職員に対する他害行動の理由と原因

①職員が求める行動以外に別の行動の欲求がある

②職員に自己の優位性を示す。職員を試す。そのことを確認したい欲求。

○対処と考え方

①に対して

・別の行動の欲求があったとしても、たとえば一人夜中に起きていて他の利用者の休息を妨げる行為は許されない。従って（眠らないにせよ）自分の居室で過ごすことは必要。

その職員の指示に従うか従わないかは職員に対する信頼にかかっている。

「自分のことを大切に考えてくれている」との思いが日頃感じられない職員に対しては基本的に②の行動が現れると考える。

②の行動の意味は？

・人間の中に誰にでも存在している動物的本能。他に対してどちらが優位か。劣位のものに対する尊大無法な振る舞い。自閉症者はこうした要素が比較的大きいと考えられる。群れの中の順位という動物的本能。→これが「人を見て粗暴な行動を取る」ことの意味

③「職員に対する信頼」とは

信頼は上位と感じる人に対してだけ感じる（生じる）ものではない（動物においても）。

仲の良い兄弟姉妹に対しては誰も粗暴な行動はとらない。我々はこの信頼を「親身に」という意味に置き換えたいと思う。K君と小椋との関係を考えてみると、彼が小椋に「僕のことを思ってくれる人」という信頼を感じているのを実感している。何故か？ それは小椋が親身になって彼のことを考えてくれていると理解しているから。

年の上下に関わらず、「自分のことを親身になって考えてくれている」と彼が実感できなければ、彼は対応をより動物的本能に近づけるのである。

④「信頼」「親身に」とは何を基準に考えるべきか

一つは年齢（年齢階梯）である。自分はK君より年が上か下か。アンサンブルの利用者は意外に

そのことを気にしている可能性はある。職員だからと言って年少者が上から目線で指示命令を出して、それで信頼が生じるだろうか。それで「親身になってくれている」と思うだろうか。知的障害のある人たちはむしろそのことで、職員が醸し出してしまう雰囲気から信頼や親身の有無を我々以上に勘良く察知してしまうと思うべき。

従ってこの年齢差を踏まえ、この人が我が子だったら、自分の兄だったら、弟だったとしたら、叔父さんだったとしたらという視点で考える必要。またこれならば自分に嘘のない実感に基づいた思考が成り立つ。「利用者を第一義に」という金科玉条があるが、その時の自分の立場はどういうものであるか。利用者は年齢の差もあり、家庭環境・成育歴の違いも想像以上のものがある。そのいずれの場合にも通用する普遍的な自分の立場など存在する筈がない。それは架空の人工的な虚構である。しかし我が身と利用者とを年齢階梯的な親族関係に置き換えてみると、たちまち手応えのある実感に突き当たる筈である。そして申すまでもなく利用者の立場から言えば、それのみがこれまでの人生で理解できる体験である。

⑤制御の防具を考える前に 何にどこに意を尽くすべきか

彼の障害の困難さに思いを致し、それでも市民社会の中でそれなりに人生を楽しみながら、他者に嫌がられずみんなの中で生きて行くために、そのことが何とか出来るようになるために、もし自分の子供だったら、兄だったら、弟だったら、叔父だったらという視点で懸命に考えてみる。

「親身になる」とはそのことだし、それが本物だったらそのことに感応する人間的能力はK君は持ち合わせていると考える。

補説

・「利用者を第一義に」というその意味では誰も異論を建てられない主張は、しかしながらそれは看板に大書された指標である。つまりその意を体して支援に当たる自分はどのような立場に立てばそれが実効性ある支援になるのかについては全く関知していないのである。

現実の支援の場面に何一つ繋がらない大文字のスローガンだけを示された現場（全国の社会福祉法人）は、後は個々に思いつくまま実践に入っていくのである。

曰く、利用者ファーストなのだから、言葉遣いや接する態度を相手を「ご利用者様」と敬しながら接し支援する。

曰く、親御さんからお預かりした大切なご利用者様なのだから、どんなことがあっても重大な身体的事故などあってはならない。危険性の排除を第一の課題に衛生安全に心掛ける施設運営。というようなことしか出て来ないのである。これが支援者の立脚点、立場になり得ようか。

・一方でこのような大命題がそのまま現場での実践に繋がって行く仕事（の立場）は存在する。たとえば警察官の職務であるが、「利用者を第一義に」は利用者を国民または地域の全住民と読み替えば、その人達の年齢や社会的立場や資産の有無などに一切関係なく、国民・地域住民の安寧平安のためという立場を貫くのが自分の立場となるのである。これは税務に関わる公務員なども同様。一般に「公務員」という立場は大命題が示されれば、後はその適用に当たっては対象たる国民に平

等という態度立場を取ることが実践的業務となるし、ほとんどがそれで大過ないのである。

・しかし福祉の仕事に当たる者にとって上記の立場を取るとは殆ど無効である。現場での対象者は千差万別で個々の事情にはそれぞれ遥かな乖離があるからである。従って対象に応じて自らの立場を定めなければ支援という実践は効力を持たないのである。

・この論考では障害者支援を己の生業とする者の立場について触れ、それを対象者との年齢階梯を踏まえ親族関係に類比（アナロジー）することを陳べた。謂わばアンサンブルを大きな共同体＝家族と擬定したのである。

「古臭い、保守的な家族主義ですか」とあざける声はすぐ聞こえて来そうである。しかし封建的家族主義から、家父長の専制的統制・家族擁護のための人格よりも経済優先などの要素を全く排除できれば、信頼と親愛に満ちた家族主義ほど人間が安息を感じられる関係が他にあるか。それ以外に支援に当たって支援者が立脚すべきどんな立場があるかと思案探索しても、出会うものは全て空疎で作り物の、全く生きた実存の腹に響くものを見聞したことがないのである。

それは何故かと言えば、人類がホモサピエンスとなって以来の無意識に営んできた自然性、すなわち家族・親族の関係と無縁な空想の産物だからである。誰かが意図して命じたわけでもないのに何万年何十万年前から人類が継続してきた行為から生じた結果としての人間関係が家族であり親族という関係性である。それと縁が切れたところの虚構の人工的人間関係だからである。だれもそんな関係を示されても胃の腑に落ちないのである。一方家族関係に支援の立脚点を求めることは、支援者にとっても利用者にとってもこれまでの自身の成長過程で必ず体験としてくぐった実感があるのである。その共有する実感に橋を渡し、共鳴へと繋げて行くのが比喩的に言えば支援の中心環である。すなわち全人類がこれまで無数に無意識に繰り返して来た自然性に立脚することが我々の支援に当たっての思想となるのである。